

### 第3回音楽教育実践学フォーラム報告



2026年2月21日（土）13:00～16:00、貞静学園短期大学を会場に、第3回音楽教育実践学フォーラムが開催されました。

本フォーラムはハイフレックス型で開催し、沖縄から北海道まで全国の支部から、対面とオンラインを合わせて40名ほどの参加がありました。学部生や大学院生、初等・中等教育に携わる現場教員、大学教員まで幅広い所属の参加者が、互いの立場を越え、自由に意見を交わす貴重な学び合いの場となりました。

- 司会進行 藤本 佳子（大阪教育大学）
- 講師 横山 真理（東海学園大学）
- 実践事例提供 小栗 祐子（東海学院大学）
- 授業記録作成 横山 真理（東海学園大学） 作成協力：渡邊 真一郎（畿央大学）

テーマは、前回のフォーラムに引き続き、「音楽教育実践学における授業研究の方法としての『授業分析』」を取り上げました。本学会で研究発表をする際、音楽科授業実践の記録をもとに分析するという研究方法を用いている会員は非常に多く、「授業分析」は関心の高いテーマとなっています。

「授業分析」は、より良い授業実践の創造のために「授業という複雑な事象を科学的に探究し知見を導き出す」研究方法の一つです。その手続きや実際について、体験を通して考えることをねらいとして、今回の企画を行いました。

フォーラム当日は、最初に話題提供として、「授業分析」の定義や要点、「『授業記録』に基づく授業分析」の視点について、講話がありました。講話では、分析の視点として、①学びの対象、②学びの過程、③学びの意味生成、の3点が提示され、「資料に基づき事実を捉える」ためのポイントについて具体的な例を挙げて説明がありました。

次に、その説明に基づき、会場とオンラインそれぞれが3グループに分かれ、「児童は『何を』『どのように』学んでいるのか」という分析のテーマに沿って、授業記録に取り組みました。

今回、分析の対象としたのは、小島律子・関西音楽教育実践学研究会著『生活感情を表現するうたづくり—理論と実践—』（2014 黎明書房）に掲載されている、「事例8《百人一首のうた》小学校6年生」の事例に基づいて作成された授業記録です。分析前に、実践者より実践概要の説明を聞く場を設けました。

グループワークのあと、対面とオンライン両方の参加者をビデオ会議システムでつなぎ、各グループで得られた「洞察」を全体で交流し、同時双方向型の意見交流が行われました。

参加者からは、「授業分析の基本から学べた」「分析の視点を共有することができ、短時間で充実した話し合いができた」「参加者同士で子どもの事実について語り合うことで、自分の考えが広がるよい場だった」「自分が深掘りしたいと思える研究の視点が得られた」といった感想が寄せられました。

「授業分析」は、実践を取り扱う本学会の根幹に関わる課題です。参加者の意見を取り入れながら、今後も継続して本テーマに取り組んでいきたいと考えます。

